



Title	イテリメン語の形動詞に関する考察
Author(s)	小野, 智香子
Citation	北方言語研究, 3, 137-154
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52606
Type	bulletin (article)
File Information	10_ONO.pdf



[Instructions for use](#)

イテリメン語の形動詞に関する考察¹

小野 智香子

(千葉大学 特任研究員)

1. はじめに—イテリメン語における定動詞と形動詞について

本稿はイテリメン語 (チュクチ・カムチャツカ諸語²) の動詞接周辞 $k\sim$ - $knen$ / $knin$ / $knan$ (複数形 $k\sim$ - $kneʔn$ / $kniʔn$ / $knaʔn$ ³)、 $k\sim$ - $ʔin$ / $ʔan$ (複数形 $k\sim$ - $ʔiʔn$ / $ʔaʔn$) が動詞語幹に付加された形式についてその具体的な機能を検証し、文中で形容詞的な働きをする動詞の形式であることを明らかにして、これらを形動詞と呼ぶことの妥当性を主張する。以下、異形態を代表してそれぞれ K - $KNEN$ 形、 K - IN 形と呼ぶことにする⁴。

形動詞の議論をする前に、まず定動詞の構造を見ておきたい。イテリメン語の定動詞は、接辞により法・人称・数・テンス・アスペクトを表示し、述語として機能する。

(1) a. $\chi oqen$ kza $wetat-qu-\emptyset-c?$ - kma $\chi oqen$ $t^{\prime}-wetat-qu-\emptyset-kicen.$
 そこで 2SG.ABS 働く-DUR-PST-2SG 1SG.ABS そこで IND.1SG-働く-DUR-PST-1

「君はそこで働いていたの?」「私はそこで働いていた。」(自動詞文)

b. $k\acute{o}man$ isx $weqanl$ $lot-al-nen.$
 1SG.POSS 父.SG.ABS 熊.SG.ABS 撃つ-FUT-3>3SG

「私の父は熊を撃つだろう。」(他動詞文)

イテリメン語の定動詞は、「法・人称⁵—動詞語幹—アスペクト—テンス—人称・数」という構造を持っている。自動詞文(1a)において、 $wetat-qu-\emptyset-c$ 「君は働いていた」(< $wetat$ 「働く」)は直説法主語 2 人称単数過去継続相、 $t^{\prime}-wetat-qu-\emptyset-kicen$ 「私は働いていた」は直説法主語 1 人称単数過去継続相の定動詞である(継続相の接尾辞 $-qzu$ は自由に $-qu$ と交替可能⁶)。自動詞文の主語は絶対格で表示される。他動詞文(1b)の $lot-al-nen$ 「撃つだろう」(<

¹ 本稿は科学研究費助成事業研究課題「北東ユーラシア少数言語の電子アーカイブ環境構築とドキュメンテーション研究」(平成 23-26 年度 基盤研究 B, 研究代表者:長崎郁, 課題番号 23401025)による研究成果の一部である。また科学研究費助成事業研究課題「コリャーク語形容詞述語構造に関する記述・類型研究」(平成 22-24 年度 基盤研究 C, 研究代表者:呉人恵, 課題番号 22520394)に連携研究者として参加することにより、本稿に関する議論の機会を得ることができた。ここに感謝の意を表したい。

² このうち、チュクチ語・コリャーク語・アリュートル語・ケレク語が同系であることは疑いが無いが、筆者はこれらの 4 言語とイテリメン語の同系性については未解決であるという立場をとっているため、本稿では「チュクチ・カムチャツカ語族」ではなく「チュクチ・カムチャツカ諸語」とした。

³ イテリメン語における複数形は $-(V)ʔ(n)$ という形態をとる。これは名詞・形容詞・動詞に共通する複数マーカーである。

⁴ 接頭辞部分の k は母音およびと鳴音(sonorant)の前の位置で k^{\prime} となる。また接尾辞部分の $-knen$ / $knin$ / $knan$ 、 $-\ʔin$ / $ʔan$ の交替については、強母音(e, a, o)を含む語根と結合する場合に $-knan$ 、 $-\ʔan$ が選択される傾向があるが、絶対的な基準ではなく、 $-kniʔn$ の使用も含めて個人的な変異である場合が少なくない。

⁵ 直説法 2 人称・3 人称単数は接頭辞 \emptyset であるが、本稿ではこのゼロ接頭辞とそのグロス表記しない。

⁶ $-qu$ は $-qzu$ の z が脱落した形と考えられ、口語で頻繁に現れる。

lot「～を撃つ」)は直説法主語3人称・目的語3人称単数未来時制の定動詞である。他動詞文(能動態)の主語・目的語はともに絶対格で表示される。

これに対しK--KNEN形、K--IN形は名詞を修飾したり、他の述語の補語としても機能する。

(2) a. i?i?u-nk zolo-z-in play k-k'əsxɪ-knin nənc.
 岸-LOC 横たわる-PRES-3SG 大きい.SG.ABS K-乾く-KNEN 魚.SG.ABS

「岸に大きな乾いた魚が横たわっている。」

b. məzin c'amzanɣ li k'-wetat-knin ɪ-qzu-ø-in.
 1PL.POSS 人間.SG.ABS とても K-働く-KNEN である-DUR-PST-3SG

「私たちの人間(=イテリメン)はとてもよく働く(者)だった。」

(2a)ではk-k'əsxɪ-knin(<k'əsxɪ「乾く」)、が名詞nənc「魚」を連体修飾している。また(2b)ではk'-wetat-knin(<wetat「働く」)がɪ-qzu-ø-in「～だった」(<ɪ「～である」直説法3人称過去継続相)の補語となっている。

他動詞にはI類とII類の2つのタイプがあり、I類の他動詞はK--IN形、II類の他動詞はK--KNEN形をとる⁷。(3)は他動詞の例である。

(3) tinu əŋqɣɣ-?in k-sk-?an oromx.
 これ 白樺の皮-MDF K-作る-IN 容器.SG.ABS

「これは白樺の皮から作られた容器だ。」

(3)のk-sk-?an(<sk「作る」)はロシア語では被動形動詞sdelannyjで訳される。詳しくは4.4節で検討するが、K--IN形は(3)に見られるように受身の意味になることがある。

形動詞はしばしば「分詞」(participle)とも呼ばれる。Haspelmathは通言語的観点から、分詞を「動詞的形容詞、すなわち動詞から規則的に派生された、形容詞のようにふるまう語」(verbal adjectives, i. e. words that behave like adjectives... (中略) ... regularly derived from verbs)と定義している(Haspelmath 1994: 152)。一方、「形動詞」(prichastie)というのは主にスラヴ系諸言語の研究で用いられてきた術語である。動作と結びついた名詞類を指し示し、限定(修飾)的に用いられる定動詞ではない動詞の形であり、動詞と形容詞の両方の特徴を合わせ持つとされる(Jartseva et. al., 1998:399)。ここで言う「分詞」と「形動詞」はほとんど同じものを指しているが、本稿では「形動詞」という術語を使用する。言語によっては分詞が副詞的な働きをする場合があるが、イテリメン語においては「分詞」というよりも「形動詞」と呼ぶ方が、動詞から派生して形容詞的なふるまいをする現象をより示差的・明示的に表すことができると考えられるからである。

以下、第2節ではK--KNEN形とK--IN形に関する先行研究を概観し、第3節で形容詞

⁷ 大部分の他動詞(I類)はk-~-?in/?-anだが、自動詞と同様の形態k-~-knen/-knin/-knanを取る他動詞(II類)がある。例:la「～を話す」、əntxla「～を運ぶ」など。II類の他動詞は人称や不定詞などの接尾辞に-k音が含まれることがその特徴である(Volodin 1976, 1999, 小野 2010 参照)。

との比較を行い、第4節でテキスト中の具体例を検討、第5節でこの形式と形容詞・定動詞との比較の総括を行う。本稿で扱うイテリメン語データは、特に言及のない限り筆者のフィールド調査により得られたデータに基づく。文献からの引用データについてはその旨記載する。

2. 先行研究

イテリメン語の動詞の K--KNEN 形、K--IN 形については、これまで表1のように記述されてきた。Bogoras (1922)と Stebnitskij (1934, 1936) は、イテリメン語の K--KNEN 形をチュクチ語・コリヤーク語の ye-~-lin 形、K--IN 形をチュクチ語・コリヤーク語の n-~-qin 形に相当するものとして扱っているが、その根拠についての説明はなく、ごく簡単な記述にとどまっている。

<表1>先行研究における K--KNEN 形・K--IN 形についての記述

	K--KNEN 形	K--IN 形	備考
Bogoras (1922)	チュクチ語・コリヤーク語の ye-~-lin 形に相当。自動詞に使用される。	チュクチ語・コリヤーク語の n-~-qin 形に相当。自動詞と他動詞の両方に使用され、性質を表わす。	I類の他動詞に用いられる K--IN 形と II類の他動詞に用いられる K--KNEN 形は受身の意味を持つ。
Stebnitskij (1934, 1936)	コリヤーク語の過去形動詞 ye-~-lin 形、チュクチ語の過去 II・3 人称形の ye-~-lin 形に相当する。	チュクチ語・コリヤーク語の n-~-qin 形に相当。能動態の動詞語幹の場合、受身の意味が加えられる。	
Moll (1960)	接辞 K--KNEN によって形成される形動詞は、過去時制の能動形動詞か過去時制の動詞として訳される。	接辞 K--IN によって形成される形動詞は、過去時制の被動形動詞として訳される。	
Volodin (1976, 1999)	自動詞および II 類の他動詞に付加	I 類の他動詞に付加	第3不定詞 (= K--KNEN, K--IN) は独立した述語として機能する。第3不定詞は他の不定詞と異なり定動詞に近い。過去不完了と過去完了の2種類のテンス・アスペクト形式がある。常に3人称主語と目的語(単数・複数)に関係がある。希求形 (-at) との組み合わせが許容される。

なお、チュクチ語・コリヤーク語における ye-~-lin 形、n-~-qin 形については伝統的には表 2 のように記述されている。

<表 2> チュクチ語・コリヤーク語の ye-~-lin 形と n-~-qin 形

	ye-~-lin 形	n-~-qin 形
チュクチ語 (Skorik 1977)	過去 II (proshchedshee II, rezul'tativnoe vremja)	現在 II (nastojashchee II, neperedel'noe vremja)
コリヤーク語 (Zhukova 1972)	関係形容詞 (otnositel'nye prilagatel'nye)、 過去 II (proshedshee II, neochevidnoe vremja)	質形容詞 (kachestvennye prilagatel'nye)

チュクチ語、コリヤーク語および同系のアリュートル語では、n-~-qin 形は動詞語幹、名詞語幹、形容詞語幹から（コリヤーク語では副詞語幹からも）形成することができる (Skorik 1977, Zhukova 1972, Nagayama 2003)。また近年ではコリヤーク語の n-~-qin 形を属性叙述の専用形式であるとする見方がある (呉人 2010, 2012)。

Stebnitskij はコリヤーク語の ye-~-lin 形を「過去形動詞」(prichastija proshedshego vremeni) と呼び、イテリメン語の K--KNEN 形がそれに相当していると述べている (Stebnitskij 1936:24)。K--IN 形については「能動態の動詞語幹の場合、受身の意味が加えられる」という説明を加えている (Stebnitskij 1934, 1936)。

Moll は K--KNEN 形と K--IN 形のいずれも「形動詞」(prichastija) として、K--KNEN 形はロシア語訳の際に「過去時制の能動形動詞」(dejstvitel'nye prichastija proshedshego vremeni)、K--IN 形は「過去時制の被動形動詞」(stradatel'nye prichastija proshedshego vremeni) となることを述べている (Moll 1960:215-216)。

一方、Volodin は K--KNEN 形と K--IN 形を「第 3 不定詞」(III Infinitiv⁸) と呼び、形動詞ではなく「3 人称過去」を表す独立した「述語」(skazuemoe) であるとしている。またアスペクトや希求の接辞⁹の挿入が許されることから、むしろ定動詞に近いものであると主張している (Volodin 1976:295-296, 1999:174-175)。

これらの先行研究の記述をふまえ、小野(1996)はヨヘリソンにより収集された民話に英訳を施したイテリメン語テキスト (Worth 1961) を分析し、K--KNEN 形と K--IN 形は 3 人称には限定されないこと、また意味的には遠い過去および間接話法を表す形式であることを述べた (小野 1996:72-73)。

小野(1996)は文献による民話テキストの分析であったが、イテリメン語の民話の地の文のほとんどがこの K--KNEN 形と K--IN 形によって語られている。Volodin が K--KNEN 形と K--IN 形を「3 人称過去を表す述語」であると考えたのは、民話の語りの形式が K--KNEN 形と K--IN 形によるものであったことが原因ではないかと思われる。その後の筆者のフィ

⁸ Volodin は定動詞以外の動詞の形式を、フィンランド語文法の記述に倣って「不定詞」(infinitiv) のカテゴリにまとめている (Volodin 1976, 1999 など)。

⁹ 希求の接尾辞-al は動詞語幹を派生する接辞であり、アスペクトを表示する屈折接辞 (継続相 -qzu/-qu) とは異なる扱いをする必要がある (Ono 2011 参照)。

ールド調査では、イテリメン語の会話データの中にも K--KNEN 形と K--IN 形が頻繁に現れ、述語としてだけではなく、第 1 節(2)(3)で見たように連体修飾や他の述語の補語として機能する例が観察された。そこで、K--KNEN 形と K--IN 形を「形動詞」としてとらえ直す必要があるかもしれないと考えたのである。

さて、チュクチ語やコリヤーク語では形容詞は n-~-qin 形で現れ、動詞語幹や名詞語幹も同等の位置に現れることができ、動詞でも形容詞でも共に人称を表示して叙述する形式である（呉人 2012 に詳しい）。ところがイテリメン語では、動詞と形容詞は形態的に全く別のカテゴリとして区別されている。イテリメン語の形動詞を考える上で、まずイテリメン語における形容詞の位置づけを次節に示しておきたい。

3. 形容詞

イテリメン語の形容詞の大部分は -lay/-liay という形容詞専用の形式を持つ。形容詞は副詞と同じ語根をもち、副詞は -q という接尾辞で現れる。

(4) 形容詞と副詞

teŋ-lay 「良い」	teŋ-q 「良く」
xka-lay 「熱い」	xka-q 「熱く」
c'inəŋ-lay 「美しい」	c'inəŋ-q 「美しく」
ul'u-liay 「小さい」	ul'u-q 「少し」

形容詞は(5a)のように述語となるほか、(5b)のように名詞を修飾する機能がある。

- (5) a. tin kist li play. 「この家はとても大きい。」
 この 家.SGABS とても 大きい.SGABS
- b. tin play kist. 「これは大きな家だ。」
 これ 大きい.SGASB 家.SGABS

イテリメン語の形容詞は動詞とは異なり、法・時制・アスペクト・人称を表示しない。そのような要素を表すには(6), (7)のように動詞 t 「～である」を用いる。ここでは形容詞が述語動詞の補語として機能している。

- (6) a. məzin kist li play t-qzu-Ø-in.
 1PL.POSS 家.SGABS とても 大きい.SGABS である-DUR-PST-3SG
 「私たちの家はとても大きかった。」
- b. təzin kist li play t-qzu-aŋ-in.
 2PL.POSS 家.SGABS とても 大きい.SGABS である-DUR-FUT-3SG
 「おまえたちの家はとても大きいだろう。」
- (7) a. kma li c'inəŋlay t-t-qzu-Ø-kicen.
 1SGABS とても 美しい.SGABS IND.1SG-である-DUR-PST-1

「私はとても美しかった。」

- b. jesli bi kma li c'inəŋlay k-l-qzu-kicen.
もし SBJV 1SG.ABS とても 美しい.SG.ABS SBJV-である-DUR-1
「もし私がとても美しかったら。」

例えば (6b) play l-qzu-aŋ-in 「大きいだろう」(直説法 3 人称単数未来継続相)、(7b) c'inəŋlay k-l-qzu-kicen 「もし私が美しかったら」(仮定法 1 人称継続相) のように、形容詞の形は変わらず、動詞 l 「～である」が活用する。

数については、形容詞では単数と複数が区別される。複数形は -layaʔn/-liayaʔn という形態をとる。

- (8) a. uliu-liay nieniek'e-cɣ 「小さな子供」(単数)
小さい-SG.ABS 子供-DIM.SG.ABS
b. uliu-liayaʔn nieniek'e-ʔnc 「小さな子供たち」(複数)
小さい-PL.ABS 子供-DIM.PL.ABS
c. enu-ʔn tawlo-ʔnc uliu-liayaʔn. 「このコリヤークたちは小さい。」(複数)
この-PL.ABS コリヤーク-DIM.PL.ABS 小さい-PL.ABS

格については、絶対格 -lay /-liay (9a)、具格 -lenl /-lanl (9b) とそれ以外 -layan/-liayan (9c) が区別される。

- (9) a. xka-lanl tɣəltɣəl-eŋ, om-lenl ənlem-eŋ nketwuqen¹⁰ t'-le-qzu-aŋ-kicen.
熱い-INST 肉-INST 温かい-INST 血-INST 強い IND.1SG-なる-DUR-FUT-1
「熱い肉と温かい血で私は強くなる。」
b. qec'eŋ q'-le-xc cq-lenl nu-kes.
やめる DES.2-なる-DES.2SG 生の-INST 食べる-INF
「生で食べるのをやめろ。」
c. c'inəŋ-layan mesta-nk k'-ənk-l-kniʔn.
美しい-OBL 場所-ALL K-近づく-KNIN.PL
「(彼らは) 美しい場所に近づいた。」

イテリメン語の形容詞は法・時制・アスペクト・人称を表示せず、数と格を表示するという点で、名詞に近い性質を持つということが言えるだろう。

4. イテリメン語の形動詞—具体例の検討

それでは、実際のテキストでは K--KNEN 形と K--IN 形がどのように現れているのか、

¹⁰ nketwuqen 「強い」はコリヤーク語 nəketyuqin 「強い」からの借用語と考えられる(トナカイ遊牧民コリヤークとの接触による)。コリヤーク語の n-~-qin 形がそのままの形で借用されている。

具体例を見ながら検討していこう。以下、統語上のふるまい (4.1 節)、テンス・アスペクト (4.2 節)、数 (4.3 節)、態 (4.4 節)、人称 (4.5 節)、名詞化 (4.6 節)、格 (4.7 節)、名詞語幹の K--IN 形 (4.8 節) について詳述する。

4.1. 統語上のふるまい

イテリメン語の K--KNEN 形と K--IN 形は、文中で A. 名詞を修飾する、B. 述語となる、C. 他の述語の補語となる、という機能がある。以下、具体例を挙げる。

A. 名詞を修飾

K--KNEN 形と K--IN 形が名詞を修飾する場合、(10)~(12)のように名詞に先行する場合と、(13) のように後付けで叙述する場合がある。

(10) i?ilu-nk zolo-z-in play k-k'əsxɩ-knin nənc. (=2a)

岸-LOC 横たわる-PRES-3SG 大きい.SG.ABS K-乾く-KNEN 魚.SG.ABS

「岸に大きな乾いた魚が横たわっている。」

(11) tinu əŋqsɣ-ʔin k-sk-ʔan oromx. (=3)

これ 白樺の皮-MDF K-作る-IN 容器.SG.ABS

「これは白樺の皮で作られた容器だ。」

(12) enu-nk kartoφelɩ-ank sverxu q'-uzu-s-x k'-əxta-ʔan nənc.

この-ALL ジャガイモ-ALL 上から DES2-置く-PRES-DES2>3SG K-捌く-IN 魚.SG.ABS

「このジャガイモに、上から捌いた (=捌かれた) 魚を乗せろ。」

(13) enu i? xmelɩa-ʔan, qaʔta k-qjo-knin, n-insat-es-cen kwajonka-nk.

この 水.ABS ホップ-MDF すでに K-冷める-KNIN PASS-流す-PRES-PASS>3SG 樽-ALL

「すでに冷めたこのホップ水、(その水が) 樽に注がれる。」

(10), (13) は自動詞 k'əsxɩ「乾く」、qjo「冷める」が K--KNEN 形で現れている。(11)と(12)の動詞 sk「～を作る」、əxta「～を捌く」はともに他動詞であり、K--IN がついて受身の意味「作られた」「捌かれた」となって、名詞 oromx「容器」、nənc「魚」をそれぞれ連体修飾している。

B. 述語になる

K--KNEN 形、K--IN 形は文中で述語として機能することができ、特に民話の地の文は K--KNEN 形、K--IN 形で語られることがほとんどである。(14)は自動詞 (K--KNEN 形) の例である。

(14) ememqut uxt-ank k-piki-knin.

エメムクト.ABS 森-ALL K-行く-KNEN

「エメムクトは森へ行った。」

(14)の文では k-piki-knin「行った」(<piki「行く」)が自動詞述語である。(15)に他動詞(K--IN形)の例を挙げる。

(15) na majka k-c'inji-ʔin nin.
 3SGABS シャツ.SGABS K-~を縫う-IN 3SG
 「彼女はシャツを縫った。」

(15)では na (3 人称単数絶対格代名詞) が動作主、majka「シャツ」(単数絶対格) が動作の対象であり、k-c'inji-ʔin (<c'inji「~を縫う」) は他動詞述語となっている。

C. 他の述語の補語になる

K--KNEN 形、K--IN 形は他の述語の補語となることができる。(16)は K--KNEN 形、(17)は K--IN 形の例である。

(16) a. məzin c'amzanɣ li k'-wetat-knin ɩ-qzu-Ø-in. (=2b)
 1PL.POSS 人間.SGABS とても K-働く-KNEN である-DUR-PST-3SG

「私たちの人間はとてもよく働く(者)だった。」

b. knin ɲic li k'-wetat-knin le-Ø-in.
 2SGPOSS 妻.SGABS とても K-働く-KNEN なる-PST-3SG

「おまえの妻はとてもよく働くようになった。」

(17) nuc k'-ənli-ʔin ɩ-qzu-Ø-in.
 扉.SGABS K-~を開く-IN である-DUR-PST-3SG

「扉は開けられた(状態)だった。」

(16a) の k'-wetat-knin (<wetat「働く」) および(17)の k'-ənli-ʔin (<ənli「~を開ける」)は ɩ-qzu-Ø-in「~だった」(自動詞 ɩ「である」の定動詞:直説法3人称単数過去継続相)の補語、(16b)の k'-wetat-knin は le-Ø-in (自動詞 le「なる」の定動詞:直説法3人称過去)の補語として機能している。また(18)は ɩ「である」の K--KNEN 形の k-ɩ-qzu-knen が述語となっており、k-k'enezi-knen (<k'enezi「考える」)が補語となっている文である。

(18) li k-k'enezi-knen k-ɩ-qzu-knen.
 とても K-考える-KNEN K-である-DUR-KNEN
 「(彼は)とてもよく考える(人)だった。」

(18)のような例は、特に地の文が K--KNEN 形、K--IN 形で語られる民話においては珍しくない。

ここまで、K--KNEN 形、K--IN 形の3つの機能について見てきたが、イテリメン語では形容詞が統語上これと同様の振る舞いをする。以下 (19)~(21)に (a) 形容詞、(b) K--KNEN 形、(c) K--IN 形を並べて比較してみよう。

A. 名詞を修飾

(19) a. tin play kist. (=5b)

これ 大きい.SG.ASB 家.SG.ABS

「これは大きな家だ。」(形容詞)

b. na li k'-wetat-knin jimsx.

3SG.ABS とても K-働く-KNEN 女.SG.ABS

「彼女はとてもよく働く女だ。」(K--KNEN 形)

c. tinu əŋqsy-ʔin k-sk-ʔan oromx. (=3)

これ 白樺の皮-MDF K-作る-IN 容器.SG.ABS

「これは白樺の皮から作られた容器だ。」(K--IN 形)

B. 述語になる

(20) a. tin kist li play. (=5a)

この 家.SG.ABS とても 大きい.SG.ABS

「この家はとても大きい。」(形容詞)

b. ej kutx, kza li k'-intemne-knen.

おい クトフ.ABS 2SG.ABS とても K-騙す-KNEN

「おいクトフ、おまえはよく騙す(ずるい)。」(K--KNEN 形)

c. n'ieniek'e-cɣ layx-enk k'-ənzolŋa-ʔan

子供-DIM.SG.ABS 母-SG.LOC K-寝かせる-IN

「子供が母に寝かされた。」(K--IN 形)

C. 他の述語の補語になる

(21) a. məzin kist li play ʔ-qzu-Ø-in. (=6a)

1PL.POSS 家.SG.ABS とても 大きい.SG.ABS である-DUR-PST-3SG

「私たちの家はとても大きかった。」(形容詞)

b. məzin c'amzanɣ li k'-wetat-knin ʔ-qzu-Ø-in. (=2b)

1PL.POSS 人間.SG.ABS とても K-働く-KNEN である-DUR-PST-3SG

「私たちの人間はとてもよく働く(者)だった。」(K--KNEN 形)

c. nuc k'-ənfi-ʔin ʔ-qzu-Ø-in. (=17)

扉.SG.ABS K-～を開く-IN である-DUR-PST-3SG

「扉は開けられた(状態)だった。」(K--IN 形)

(19)～(21)の例から、K--KNEN 形と K--IN 形は統語上、形容詞と同様の機能を有していることがわかる。

4.2. テンス・アスペクト

K--KNEN 形、K--IN 形は、述語になる際に過去時制で訳されることが多い。ただし自動詞の K--KNEN 形は、上述の (16) k'-wetat-knin 「よく働く」(< wetat 「働く」)、(18)

k-k'enezi-knen 「よく考える」 (<k'enezi 「考える」) や (20b) k'-intemne-knen 「よく騙す (= ずるい)」 (< intemne 「騙す」) などのように、叙述対象の恒常的な性質を表している場合もある。

同様に K--KNEN 形が語彙化して辞書の見出し語にもなっている(22)はいずれも性質を表す語である。

(22) a. k-tirwit-knen 「太った」 < tirwit 「太る、脂がのる」

b. k-txlote-knen 「老婆」 < txlote 「(女性が) 老いる」 (Volodin & Khalojmova 2001)

(22)b は「(女性が) 老いる」の意から、名詞化して「老婆」の意になったと考えられる。また上述の(18)や次の(23)のように、K--KNEN 形、K--IN 形に継続相の接尾辞 -qzu/-qu が挿入される例も多い。

(23) a. pakuk tenaq k-sij-qzu-knin mec'anj, mec'anj.

小鳥.SG.ABS 再び K-飛ぶ-DUR-KNEN 遠くへ 遠くへ

「小鳥は再び飛び続けた、遠くへ、遠くへ。」

b. weqanl k-txəl-qzu-ʔan nin noz.

熊.SG.ABS K-食べる-DUR-IN 3SG 魚の干物.SG.ABS

「熊は魚の干物を食べ続けた。」

4.3. 数

K--KNEN 形、K--IN 形には形容詞と同様、単数・複数の区別がある。自動詞で主語が複数の場合、(24)のように複数形 k-~-kneʔn/-kniʔn/-knaʔn になる。

(24) itx k-piki-kniʔn i qaʔm k'ol-kaq k-l-kniʔn.

3PL.ABS K-行く-KNEN そして NEG 来る-NEG K-である-KNEN.PL

「彼らは行った。そして戻って来なかった。」

(24) では k-piki-kniʔn 「行った」 (<piki 「行く」)、k-l-kniʔn 「~だった」 (<l 「である」) が複数形になっており、主語が複数であることが示されている。

K--IN 形の複数形は k-~-ʔiʔn/-ʔaʔn である。他動詞は目的語(被動者)の数に呼応する。(25)では他動詞 ənsxt 「~を産む」に、単数形の k-~-ʔin がついていて、目的語(被動者)である p'amxcəx 「男の子」の数と一致している。

(25) k'-rowa-knan miti, p'amxc-cəx k'-ənsxt-ʔin nin.

K-出産する-KNEN ミティ.ABS 男の子-DIM.SG.ABS K-~を産む-IN 3SG

「ミティは出産した、男の子(単数)を産んだ(単数形)。」

(25) では動作主である miti 「ミティ(固有名詞)」も単数なので、動詞が動作主と被動者

のどちらを表示しているか区別がつきにくい(なお話者によると、*nin* が動作主である *miti* を表しているとのことである)。被動者が複数である(26)と比較されたい。

- (26) a. k'-ənzʉ-ʔiʔn nin emenqut kərwete-s qoʃa-ʔnc.
 K-始める-IN.PL 3SG エメムクト.ABS つなぐ-INF トナカイ-DIM.PL.ABS
 「エメムクトはトナカイ(複数)をつなぎ始めた(複数形)。」
- b. qneʃ sirim k-piki-knen, k'-jawna-ʔaʔn itɣ.
 すぐに シリム.ABS K-行く-KNEN K-迎える-IN.PL 3PL.ABS
 「すぐにシリムは行って、彼ら(複数)を出迎えた(複数形)。」

(26a) *k'-ənzʉ-ʔiʔn* は *ənzʉ* 「～し始める」という他動詞に複数形 *k-~ʔiʔn* がついた形であり、動作主 *ememqut* 「エメムクト」(単数)ではなく、被動者 *qoʃaʔnc* 「トナカイ」(複数)の数と一致している。同様に、(26b) *k'-jawna-ʔaʔn* (<*jawna* 「～を迎える」)も、動作主 *sirim* 「シリム」(単数)ではなく、被動者(出迎える対象)である *itɣ* 「彼ら」が複数であることを示している。

4.4. 態

イテリメン語の受身は、絶対格で表示される動作主名詞句の削除または場所格への降格によって表される (Georg & Volodin 1999: 164, Volodin & Khalojmova 2001: 253-254)。第2節で概観した先行研究でも指摘されているように、*K--IN* 形はしばしば受身の意味を伴う。これは4.3節で述べたように、*K--IN* 形が動作主ではなく被動者の数を表すことと密接に関わっている。(27)は *K--IN* 形が述語になっている例である。

- (27) enu sis-ecɣ k'-anza-ʔan ɣamlɣ-eɬ.
 この 翼-DIM.SG.ABS K-塗る-IN 脂-INST
 「この翼は油で塗られた。」(*K--IN* 形)

(27)では *k'-anza-ʔan* は他動詞 *anza* 「～を塗る」の *K--IN* 形で、ロシア語の被動形動詞 “*namazano*” で訳されている。定動詞の受身文・能動文の例(28)と比較してみよう。

- (28) a. enu sis-ecɣ eku-cɣ-enk n-anza-Ø-cen ɣamlɣ-eɬ.
 この 翼-DIM.SG.ABS 女の子-DIM.SG.LOC PASS-塗る-PST-PASS>3SG 脂-INST
 「この翼は女の子に脂で塗られた。」(定動詞・受身文)
- b. ekucɣ enu sis-ecɣ anza-Ø-nen ɣamlɣ-eɬ.
 女の子-DIM.SG.ABS この 翼-DIM.SG.ABS 塗る-PST-3>3SG 脂-INST
 「女の子はこの翼を脂で塗った。」(定動詞・能動文)

(28a)は定動詞を用いた受身文であり、絶対格で表された動作の対象 *sis-ecɣ* 「翼」が主語となっている。動作主は *eku-cɣ-enk* 「女の子(に)」のように場所格をとり、他動詞 *anza* 「塗

る」は受身の活用をする。他方能動文では(28b)のように、動作主、動作の対象ともに絶対格となり、動詞は能動態の活用をする。

K--IN 形が述語の場合も定動詞の受身文と同様に、動作主名詞句を表示する場合は (29), (30)のように場所格 -k/-(e)nk/-(a)nk で現れる。

(29) enu-ʔn eku-ʔnc kutx-ank k'-əntxa-ʔaʔn.

この-PL 女の子-DIM.PL.ABS クトフ-LOC K-忘れる-IN.PL

「この女の子たちはクトフに忘れた。」

(30) kəman ze mił k-st'wat-ʔan. -k'e-nk? -nien'ek'e-ʔnc-k.

1SG.POSS EMPH すべて K-踏む-IN 誰-SG.LOC 子供-DIM.PL-LOC

「私のは全て踏まれた。」 「誰に？」 「子供たちに。」

(31)は K--IN 形が述語動詞 ʔ「～である」の補語となっている例である。

(31) uʔ-iʔn eʔaq kist-eʔn lem k-sk-ʔaʔn ʔ-qu-Ø-kipiniʔn.

木-MDF.PL まるで 家-PL.ABS も K-作る-IN.PL である-DUR-PST-OBL.3PL

「木の家々もまた彼らのために作られたようだった。」

これに対して、自動詞語幹から形成された K--KNEN 形は主語に対応する。(32)の əʔicku 「見る」の K--KNEN 形と K--IN 形を見てみよう。違いを分かりやすくするため複数形の例で比較する。

(32) a. wimsx-eʔn k'-əʔicku-qzu-kniʔn, əŋqa weqanł sk-əz-nen.

女-PL.ABS K-見る-DUR-KNEN.PL 何.SG.ABS 熊.SG.ABS する-PRES-3>3SG

「女たち(複数)は熊が何をするか見ていた(複数形)。」

b. mite-nk k'-əʔicku-ʔiʔn p'e-ʔn.

ミティ-LOC K-見る-IN.PL 子-PL.ABS

「子供たち(複数)はミティに見られた(複数形)。」

əʔicku は自他同語幹の動詞であり、(32a)では自動詞、(32b)では他動詞として用いられている。(32a)の k'-əʔicku-qzu-kniʔn が叙述しているのは主語である wimsx-eʔn 「女たち」(複数)、(32b)の k'-əʔicku-ʔiʔn が叙述しているのは被動者の p'e-ʔn 「子供たち」(複数)であることがわかる。

Haspelmath は分詞の態と方向性 (orientation)について能動分詞-動作主型 (active participle, agent-oriented)と受動分詞-被動者型 (passive participle, patient-oriented)に分類している (Haspelmath 1994:153)。これに従えば、イテリメン語の K--KNEN 形(自動詞)は能動分詞-動作主型、K--IN 形(他動詞)は受動分詞-被動者型にそれぞれ対応しているということが言えそうだ。

4.5. 人称

Volodin は K--KNEN 形、K--IN 形について、専ら 3 人称の主語・目的語（＝動作主・被動者）を表す述語形式であると述べている (Volodin 1976: 296)。民話テキストの地の文ではその性質上 3 人称で語られることがほとんどであるが、地の文以外（登場人物の台詞など）では小野(1996)で述べたように、必ずしも 3 人称に限られない。さらに筆者のフィールド調査でも、(33), (34) のような 1 人称・2 人称での使用例が確認された。

(33) 1 人称の例

- a. γ amux kma k-c'iri-knin.
 あたかも 1SGABS K-盗む-KNEN
 「あたかも私が盗みをしたかのようだ。」
- b. kma k'-əntxa-ʔan atno-k walc.
 1SGABS K-忘れる-IN 家-LOC ナイフ.SGABS
 「私は家にナイフを忘れた。」
- c. isx-enk muzaʔn k'-əntxa-ʔaʔn.
 父-SGLOC 1PL.ABS K-忘れる-IN.PL
 「私たちは父に忘れられた。」

(33a) では k-c'iri-knin (<c'iri 「盗む」) が 1 人称単数代名詞 kma 「私」について「盗みをした」と叙述している。(33b) k'-əntxa-ʔan (<əntxa 「忘れる」) の動作主は kma 「私」、(33c) k'-əntxa-ʔaʔn の被動者は 1 人称複数人称代名詞 muzaʔn 「私たち」である。従って、1 人称について K--KNEN 形と K--IN 形を使うことが許容されている。それでは、2 人称はどうだろうか。(34) の例を見てみよう。

(34) 2 人称の例

- a. ej kutx, kza li k'-intemne-knen. (=20b)
 おい クトフ.ABS 2SGABS とても K-騙す-KNEN
 「おいクトフ、おまえはよく騙す(ずるい)。」
- b. kza ek'nin k'-le-knen.
 2SGABS 違う K-なる-KNEN
 「おまえは違うようになった(変わった)。」
- c. kza ne it' qaʔta poxoroniit k'-il-ʔin.
 2SGABS INDR ずっと昔 埋葬する K-である-IN
 「(幽霊に対して) おまえはずっと昔に埋葬された。」

(34a) k'-intemne-knen (<intemne 「騙す」)、(34b) k'-le-knen (<le 「～になる」) の主語はどちらも 2 人称単数代名詞 kza 「おまえ」である。また他動詞の場合でも(34c)のように、2 人称単数の被動者 kza に対して il 「～である」(他) から形成された K--IN 形が使われている。このように 1・2 人称であっても K--KNEN 形、K--IN 形が使用されることは珍しくな

く、この形式が3人称に限定されているとは言えないことがわかる。

4.6. 名詞化

K--IN 形には(35)のように職業名や「～する人・もの」として名詞化した例がある。

- (35) a. k-zəmple-ʔin 「売り子、売人」 < zəmple 「～を売る」
b. k-kokazo-ʔan 「調理人」 < kokazo 「調理する」
c. k-ʎeɕeʔɪ-ʔin 「医師」 < ʎeɕeʔɪ 「治療する」
d. k-ʎale-ʔan 「動物」 < ʎale 「歩く」 (Volodin & Khalojmova 2001)

K--IN 形は一般に他動詞から形成され、動作主ではなく被動者を示すことを4.3節～4.4節で述べたが、(35)のように名詞化されたものは例外である。他動詞から形成された(35a), (35b)は被動者ではなく、動作主である「売人」「調理する人」を表している。

また(35c), (35d)は自動詞から形成されている。(35c) ʎeɕeʔɪ 「治療する」は他動詞 ʎeɕe 「～を治療する」(<ロシア語 lecit')に自動詞化の接尾辞-ʔɪがついて派生された自動詞である。通常他動詞から形成されるK--IN形が、なぜ自動詞からも形成されるのかは分かっていない。「～する人・もの」という意味を加える機能が一部で獲得されているか、何らかの類推が働いた可能性もある。ただしこのタイプの名詞化の例は数が限られており、生産的な語形成法であるとは言えない。

4.7. 格

まれではあるが、(36)のようにK--KNEN形が具格とみられる格を伴って現れることがある。

- (36) Qelxnu k-ʎxi-knen-ʎ nu-qaz-aʎ-c? ¹¹
本当に K-夜を明かす-KNEN-INST 食べる-DUR-FUT-2SG
「本当に夜を明かしたもの(昨日の残りもの)を食べるの？」 (Worth 1961: 244)

(36)の k-ʎxi-knen-ʎは ʎxi 「夜を明かす」という自動詞にK--KNENがついて「夜を明かした(もの)」のように名詞化され、具格-ʎを取った形態である。nuは「～で食事する」のように食べるものを具格で表示する自動詞であるため、この位置に具格が現れること自体は不自然ではない。

4.8. 名詞語幹のK--IN形

K--IN 形は動詞以外に、名詞語幹について「～が(たくさん)ある」という意味を表すことができる¹²。

¹¹ Worth (1961)では継続相の接尾辞-qzu/-quに相当するものが-qazu/-qazと表記されており、本稿では原文どおり表記した。

¹² コリャーク語の ye-~-lin 形がそれに近い機能を持っているようだ。Zhukovaによれば、コリャーク語

- (37) a. tin li k'-nənc-ʔin kij.
 これ とても K-魚-IN 川.SGABS
 「これはとても魚が多い川だ。」
- b. tin kij li k'-nənc-ʔin.
 この 川.SGABS とても K-魚-IN
 「この川は魚が多い。」

(37)では *nənc* 「魚」という名詞から **K--IN** 形 *k'-nənc-ʔin* が形成され「魚が多い」という意味を表している。このように名詞から形成された **K--IN** 形もまた、(37a)のように名詞を修飾したり、(37b)のように述語となったりすることができる。また (38)のように他の述語の補語となったり、(39)のように後ろから名詞句を修飾する例も見られた。

- (38) *diedufka artamon li k'-skaska-ʔan t-qu-∅-in*.
 祖父.SGABS アルタモン.ABS とても K-民話-IN である-DUR-PST-3SG
 「アルタモンじいさんはよく民話を語る(人)(よい語り部)だった。」
- (39) *iplɥ kəman k-qelɥtq-ʔin sxezi-∅-in*.
 友人.SGABS 1SGPOSS K-お腹-IN 出発する-PST-3SG
 「私の友達は大きなお腹で(妊娠した状態で)出発した」

筆者の調査では、その他 *k'-ləɥtɥ-ʔin* 「ハスカップの多い」(<*ləɥtɥ* 「ハスカップ」)、*k'-sis-ʔin* 「草が多い、草の生えた」(<*sis* 「草」)、*k'-wəm-ʔin* 「虫食いの」(<*wəm* 「虫」)など、名詞語幹からの **K--IN** 形の形成について、その生産性の高さが観察された。なお話者によれば **k'-nənc-knen* (*nənc* 「魚」) のように名詞語幹から **K--KNEN** 形を作ることはいけないという。また、名詞語幹から形成された **K--IN** 形への継続相の接尾辞 *-qzu/-qu* の付加(例: **k'-nənc-qzu-ʔin*) は許容されない。

このような名詞からの **K--IN** 形の形成を見ると、一見して名詞と動詞の両方に **K--IN** がついて名詞を修飾したり叙述したりするという形容詞的なふるまいを獲得する点において、チュクチ語やコリャーク語の *n-~qin* 形と共通すると言えなくもない。ただし、イテリメン語では形容詞語幹から **K--IN** 形は形成されない。

5. まとめ

イテリメン語における **K--KNEN** 形と **K--IN** 形について、第1節で定動詞文との違い、第2節で先行研究の記述、第3節では形容詞の特徴を概観し、第4節でその統語上のふるまい、テンス・アスペクト、数、態、人称などの要素について議論した。以上の機能を名詞、形容詞および定動詞と比較してまとめると、表3のようである。

の *ye-~lin* 形は動詞語幹からも名詞語幹からも形成され、動詞語幹の場合は過去時制(過去 II)、名詞語幹の場合は所有を表すという (Zhukova 1972: 162, 234-238)。

<表 3>名詞・形容詞・定動詞と K--KNEN 形・K--IN 形の比較（網掛けは形容詞・定動詞と共通する部分）

	名詞	形容詞	形動詞		定動詞
		-LAX (形容詞・ 副詞語幹)	K--KNEN (自動詞・ II 類の他動詞)	K--IN (I 類の 他動詞)	
格	○	○	△ (1 例のみ)	? (例なし)	×
連体修飾	△ (要接尾辞)	○	○	○	×
補語	○	○	○	○	×
数	○	○	○	○	○
述語	○	○	○	○	○
アスペクト	×	×	○	○	○
態	×	×	○ 動作主型	○ 被動者型	○
時制	×	×	△ (過去)	△ (過去)	○
人称	×	×	×	×	○

K--KNEN 形・K--IN 形の統語上のふるまいは形容詞と同等であり、加えて両者とも数を区別すること、例は少ないが具格を表示することも形容詞と同じである。一方で、一部のテンス（過去時制）、アスペクト（継続相）を表示できること、動詞の自他によりヴォイス（能動・受身）を表すことなど、動詞の機能も部分的に保持されている。以上により、イテリメン語の K--KNEN 形、K--IN 形は Volodin (1976, 1999) が述べているような「定動詞のような働きをする不定詞の一種」としてではなく、文中で形容詞的な働きをする動詞の形式である「形動詞」と呼ぶのが適切であると考えられる。

本稿では Volodin (1976, 1999) における、3 人称にしか使用されない述語としての「第 3 不定詞」への反例を示すとともに、Stebnitskij (1936) や Moll (1960) において小さく言及されるにとどまっていた K--KNEN 形・K--IN 形の「形動詞」としての記述の根拠と妥当性を示した。ただし名詞語幹から形成された K--IN 形との関係については、他のチュクチ・カムチャツカ諸語との比較を含め、別の機会に稿を改めて論じたい。

略号

1 : 1 人称	2 : 2 人称	3 : 3 人称	ABS : 絶対格
ALL : 向格	EMPH : 強調	DES : 願望法	DIM : 指小
DUR : 継続相	FUT : 未来	IND : 直説法	INF : 不定詞
INDR : 間接話法	INST : 具格	LOC : 場所格	MDF : 修飾形
NEG : 否定	OBL : 斜格	PASS : 受身	PL : 複数
POSS : 所有	PRES 現在	SBJV : 仮定	SG : 単数

引用文献

- Bogoras, Waldemar (1922) *Chukchee*. Handbook of American Indian Languages. By F. Boas. Part II. Washington.
- Haspelmath, Martin (1994) Passive Participles across Languages. In: Fox, Barbara & Hopper, Paul J. (eds.), *Voice: Form and Function*. Benjamins, Amsterdam. 151-177.
- Jartseva, V. N. et. al. (eds.) (1998) *Bol'shoj Entsyklopedicheskij Slovar'*. *Jazykoznanie*. Bol'shaja Rossijskaja Entsyklopedija, Moskva, 2-e izdanie.
- Moll, T. A. (1960) Oчерk fonetiki i morfologii sedankinskogo dialekta itel'menskogo jazyka. *Uchenie zapiski*. Leningrad. 193-222.
- Nagayama, Yukari (2003) *Oчерk gramatiki aljutorskogo jazyka*. Osaka-Gakuin Univ.
- Ono, Chikako (2011) Verb Classification and the Derivational System in Itelmen. *Linguistic Typology of the North*. Vol.2. ILCAA, Tokyo. 19-37.
- Skorik, P. Ja. (1977) *Grammatika chukotskogo jazyka*. ch. II, Leningrad.
- Stebnitskij S. N. (1934) Itel'menskij (kamchadal'skij) jazyk. *Jazyki i pis'mennost' narodov Severa*, ch. III. Moskva-Leningrad. 85-104.
- Stebnitskij S. N. (1936) *Materialy po itel'menskomu jazyku*. Lingvisticheskij fakul'tet Leningradskogo instituta filologii, literatury i istorii.
- Volodin, A. P. (1976) *Itel'menskij jazyk*. Nauka, Leningrad.
- Volodin, A. P., Khalojmova, K. N. (2001) *Slovar' itel'mensko-russkij i russko-itel'menskij*. Sankt-Peterburg.
- Volodin, A. P. (1999) Georg, Stefan, *Die itelmenische Sprache*. Grammatik und Texte. Harrasowitz Verlag, Wiesbaden.
- Worth, Dean S. (1961) *Kamchadal Texts collected by W. Jochelson.*, Los Angeles.
- Zhukova, A. N. (1972) *Grammatika korjaskogo jazyka. Fonetika, morfologija*. Nauka, Leningrad.
- 小野智香子 (1996) 「イテリメン語における k-~-knen/-knan, k-~-in/-an の用法」 千葉大学大学院文学研究科 修士論文, 1996.
- 小野智香子 (2011) 「イテリメン語の動詞人称接尾辞の機能について」 『北方言語研究』 1 : 23-39.
- 呉人恵 (2010) 「コリヤーク語の属性叙述 —主題化のメカニズムを中心に—」 『言語研究』 138: 115-147.
- 呉人恵 (2012) 「チュクチ・カムチャツカ語族における属性叙述 —N 形の意味・機能の異同に着目して—」 『北方言語研究』 2: 115-137.

Notes on Itelmen Adjectival Participles

Chikako ONO
(Chiba University)

Itelmen (a Chukotko-Kamchatkan language spoken in Kamchatka in the Russian Federation) contains the verbal forms K--KNEN and K--IN, which function as adjectives. Previously, Russian linguists considered the K--KNEN and K--IN forms to be participles similar to the *ye--lin* or *n--qin* forms in Chukchi and Koryak or infinite forms only applicable for third person past predicates. In this paper, I present examples of the K--KNEN and K--IN forms from my field data and argue that these forms should be considered adjectival participles. The K--KNEN form seems to be an agent-oriented participle when it is used with intransitive verbs, whereas the K--IN form appears to be a patient-oriented participle from transitive verbs. Both forms are used as adjectives—attributives, complements or predicates—and retain their verbal elements such as tense (primarily past tense), aspect (durative), and voice (active or passive).

(おの・ちかこ chono@faculty.chiba-u.jp)